

## 【海外の宗教動向】

### ボーダーレス時代の現代宗教問題

大澤広嗣

はつらつ

本論では、今期（二〇〇七年一〇月から二〇〇八年九月まで）における海外の宗教動向から、注目すべき動きを概観したい。取り上げるのは、第一にコソボ共和国の独立、第二にチベット騒乱、第三にローマ教皇ベネディクト一六世の対話、第四には活発化するイスラーム金融市場、である。海外からの報道を見ると、その動向に直接的ないしは間接的に宗教が関わっていることがある。いまや諸宗教への洞察なしには、世界の情勢を捉えることは難しい。国境を越えて人や情報が行きかうボーダーレスの時代に、宗教問題を知ることは必要不可欠なのである。

#### 一 コソボ共和国の独立

とスロベニア共和国、一九九一年九月にマケドニア旧ユーゴスラビア共和国、一九九二年三月にはボスニア・ヘルツェゴビナが分離した。一方では旧ユーゴを構成したセルビアとモンテネグロによって一九九二年四月、ユーゴスラビア連邦共和国が成立した。しかし同国は二〇〇三年二月にセルビア・モンテネグロと改称され、さらには二〇〇六年六月にモンテネグロ共和国とセルビア共和国に分裂した。今回、セルビア共和国から独立したコソボ共和国は、バルカン半島の中部内陸部に位置し、北東はセルビア共和国、南東はマケドニア共和国、南西はアルバニア共和国、北西はモンテネグロ共和国に接している。コソボの総人口は二〇七万人（二〇〇七年）で、民族の比率はアルバニア人（九二%）、セルビア人（五%）、トルコ人等諸民族（三%）となっている。ただし行政上の実権を握ってきたのは、少数派のセルビア人であった。

宗教については、多数派のアルバニア人はイスラーム、少数派のセルビア人はセルビア正教を信仰する。つまりムスリム（イスラーム教徒）が多くを占める国なのである。両者の間の民族対立は一九六〇年代後半から生じていたという。

そもそもコソボは、一三八九年のコソボの戦いでコソボ王国がオスマン・トルコ帝国に敗退して以降、オスマン領

コソボ共和国が二〇〇八年二月一七日に独立した。これにより東ヨーロッパのバルカン半島で、また新たな国が誕生したのである。かつてコソボはユーゴスラビア社会主義連邦共和国（以下、旧ユーゴ）の自治州であったが、一九九〇年代より激化した内戦によって連邦が解体された後に、セルビア共和国に属した。そして今回、同国から分離独立を果たしたのであった。

#### 一〇一 地域事情

バルカン半島は、宗教と民族問題で長らく問題を抱えてきた。第一次世界大戦から紛争が絶えず、「ヨーロッパの火薬庫」とも呼ばれてきた。

かつて旧ユーゴ時代には、連邦内の複雑な事情を象徴する数え歌があった。すなわち「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」という歌詞である。五つの民族は、セルビア人、クロアチア人、スロベニア人、モンテネグロ人、マケドニア人、三つの宗教はカトリック、ギリシャ正教、イスラームを指した。

一九九〇年代から激化した内戦により、旧ユーゴは解体していった。同国より一九九一年六月にクロアチア共和国

となり、イスラームに改宗したアルバニア人が同地に移り住み、ムスリムが優勢となった。その後には一九一三年のバルカン戦争でトルコに勝利したセルビアがコソボを領有した。

第二次世界大戦後は、旧ユーゴを構成したセルビア共和国の自治州となった。一九七四年から共和国と同等の自治が認められたが、一九八七年前後から自治権が縮小された。一九八九年から事実上の戒厳令下となり、一九九八年からはセルビアの治安部隊とアルバニア人武装勢力との間で戦況が激化した。一九九九年三月、北大西洋条約機構（NATO）軍がコソボ内戦に介入して、空爆を行った後、同年六月九日に停戦が成立した。NATOの占領を経て、国連が暫定統治を行ってきた。二〇〇七年八月のアメリカ・欧州連合（EU）・ロシアの三者による仲介によってコソボとセルビア間で、地位交渉が再開されたが、セルビアとロシアの反対で同年十二月に決裂した。しかしアメリカとEUの強い支持で、独立することになったのである。

#### 一〇二 独立後の動き

コソボ自治州議会は二〇〇八年二月一五日、臨時議会を開き、セルビア共和国からの独立宣言を採択した。これにより一七日にコソボ共和国が独立した。国土の面積は約一